

2022/3/27

ヨハネの黙示録 講解メッセージ①

『聖書の読み方—黙示録を読むための準備—』

「イエス・キリストの黙示。これは、すぐに起こるはずの事をそのしもべたちに示すため、神がキリストにお与えになったものである。そしてキリストは、その御使いを遣わして、これをしもべヨハネにお告げになった。ヨハネは、神のことばとイエス・キリストのあかし、すなわち、彼の見たすべての事をあかしした。この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを心に留める人々は幸いである。時が近づいているからである。」(黙示録 1:1-3)

「イエス・キリストの黙示」とは、黙示文学の形式をとっていることを表しています。黙示文学とは、イスラエルが迫害されていた時、彼らに希望を与えて励ますために、象徴のイメージを使って書かれた様式です。旧約聖書ではダニエル書がそれにあたります。

このヨハネの黙示録は、「すぐに起こるはずのこと」、つまり「あなたがまもなく直面するであろうこと」について書かれていると最初に述べられています。二千年前と今、生きている間に誰もが共通して出会う出来事、それは、「悪との戦い」です。

「悪との戦い」は、「罪との戦い」、あるいは「迫害・反キリストとの戦い」とも言えます。反キリストとは神を否定する考え方のことだと、ヨハネの福音書にあります。また、悪とは、イエス・キリストを第一としないことの総称です。これは、いつの時代でもクリスチャンに起きる戦いです。富や名声に心を奪われる、あるいは、困難や迫害に信仰が揺さぶられるなど、この世には、イエス・キリストから目をそらせようとする誘惑がいつもあります。そういうものを象徴して書いているのが黙示録です。

黙示録が書かれた時代にはローマ帝国の迫害がありました。今の日本における最大の迫害は世の心遣いです。神のことよりも人のことを優先させる思いによって、なかなかイエス・キリストを証しできません。どんな形であっても、いつの時代にも、クリスチャンになると同時に迫害が起こり、戦いがあるのです。これが「すぐに起こるはずのこと」です。

「時が近づいているから」(1:3)とは、ヘブライ語の「エンギュース」「近くに、そこにある」という意味です。「時」とは「終わりの日」のことで、「個人の肉体の死」を指します。よく「終わりの日」とは「この世界の終わるとき」と解釈されますが、それは個人にとっては自身の肉体の死となります。誰の身にもすぐに起こることとある以上、このように解釈しなければ整合性が取れません。この黙示録冒頭の解釈は、黙示録全体の解釈の土台です。ここを間違えると正しく理解することができません。黙示録ほど、キリスト教に反対する人たちに利用されるものはありませんから、正しい立ち位置を理解しなければすぐに惑わされてしまいます。個人の終わりの日は、いつの時代も、誰に対しても近づいてきていますから、誰もが終わりの日に向かって生きています。ヨハネの黙示録は、その間に起こることを啓示しているのです。

私たちに肉体の死が訪れると、私たちはすでに霊のからだを着せられ永遠のいのちを持っていますから、死と同時に天に引き上げられます。これがイエス様の再臨です。肉体の死と同時にイエス・キリストが来られて、永遠のいのちを持っている私たちは瞬間的に天に引き上げられるというわけです。

「ヨハネから、アジャにある七つの教会へ。今いまし、昔いまし、後に来られる方から、また、その御座の前におられる七つの御霊から、また、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安が、あなたがたにあるように。イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。キリストに栄光と力が、とこしえにあるように。アーメン。」(黙示録 1:4-6)

しかし、私たちが天に引き上げられるまでには、この地上で様々な困難に出会います。でも、たとえどんな悪に出会おうとも、あなたは必ず天に引き上げられて、その悪は最終的に滅ぼされるから希望を失うなど、黙示録は励ましているのです。つまり黙示録は、希望の書です。それが黙示録の立ち位置です。

神は、ヨハネに、福音書、手紙、黙示録を書かせました。黙示録は、その完結編です。福音書は、誰が神なのか、誰を信仰すればよいのかを教えるために書かれています。そして、ヨハネの手紙によって、イエス様を信じる者は、何を目指し、どのように暮らせばよいのかを具体的に示されました。その手紙の中で一貫して教えられているのは、「互いに愛し合いなさい」ということです。さらに、激しい迫害の中にあつた当時のクリスチャンたちに対して、希望を与えるために黙示録が書かれました。黙示録には、どんな迫害にあおうとも、必ずあなたは天に引き上げられるから心配しなくていいということが象徴的に書かれています。

聖書はすべての教会、すべての人を励ますために書かれたものです。黙示録も、当時のクリスチャンたちに語ると同時に、今の私たちに対しても語られています。そのため、この最後の迫害については象徴を使いながらも、結論はわかりやすい言葉を使って、私たちに希望を与えていようとしているわけです。

■黙示録の理解を誤るとどうなるのか

かつてノストラダムスの大予言というものが流行ったことがありますが、世の中には、黙示録をそれと同じようにとらえる人々が多くいます。黙示録は、この世界が終わるときの予言であり、今は黙示録のどのあたりかと知ろうとして用います。キリスト教の中でも、実際にこの世界が終わるときと理解するのが、最もポピュラーと言えます。そして、象徴ではなく、文字とおりに読む傾向が非常に強いのです。私は、三つの神学校で学びましたが、それぞれ全く違う終末論を教えていました。しかし、このように、黙示録を象徴ではなく文字とおりに、この世界に実際に起こることだとする読み方は、大きな危険をはらんでいます。

「勝利を得る者、また最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与えよう。彼は、鉄の杖をもって土の器を打ち砕くようにして彼らを治める。」

(黙示録 2:26-27)

これを文字とおりに読み、クリスチャンが反キリストである異教徒を打ち破って治めるようになるのだ、それがキリストの再臨を迎える準備だ、という誤った解釈で、11世紀に十字軍というものが起こりました。そして、彼らは、キリスト教の名のもと、キリスト教に反対する人たちを虐殺したのです。聖書に書いてあるから、そうしなくてはいけないと信じ込み、御言葉を戦争や虐殺を正当化する根拠にしてしまったのです。

黙示録が、象徴ではなく実際に起こることだとする読み方は、クリスチャンか敵かという二極化で判断するようになります。その結果、クリスチャンの戦争を正当化してきました。しかし、これは間違いです。確かに黙示録にはその概念がありますが、その敵とはキリストを否定する不信仰です。人ではありません。不信仰をもたらした悪魔と死こそが、私たちの敵であり、今この世は悪魔と死の支配下にあります。だからイエス・キリストは十字架で悪魔と死とを滅ぼされたのです。人は私たちにとって敵ではありません。イエス様の教えは、「汝の敵を愛せよ」です。ヨハネの手紙は「互いに愛し合いなさい」と繰り返し教えています。

また、黙示録の預言を、神がアブラハムに立てた永遠の契約がイスラエルに成就する過程と重ね合わせる読み方もよくされます。神が立てた契約はイスラエルになされたものであって、イエス・キリストが建てた教会とは分けて考えるわけです。その結果、1948年にイスラエルが国として復興した時、いよいよ終わりの時が来たと考え、最終戦争が起きて世界は終わると考えた人が大勢いました。しかし、そうではありませんでした。これも、黙示録を象徴ではなく文字どおりに解釈したことによるものです。ですから、聖書は次のように注意を促しています。

「あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。もしあなたがたがキリストのものであれば、それによってアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。」(ガラテヤ 3:26-29)

アブラハムに立てた約束の子孫は、ユダヤ人もギリシャ人もなく、すべてのクリスチャンのことだと、はっきり教えられています。神の預言は、イスラエルにのみ語られたものではありません。

聖書を正しく理解するためには、イエス・キリストを中心に読まなければなりません。イエス・キリストを信じる者は死からいのちに移されたとおりに、私たちはすでに神の御手にあります。その意味では、すでに神の国は実現し、霊的には終わりの日は来たというこ

とになります。あとは、肉体の死をもって、神の国に引き上げられる時が来るのです。その時までにはいろいろな迫害や訓練があるということを、黙示録は示しているのです。

黙示録をイエス様の言葉と切り離して考えることによって、新たな教理が生まれてしまいます。これは非常に危険なことです。たとえば、第二次世界大戦の時、これは終わりの日の戦いであるとして、イエス・キリストの再臨は近いと判断して仕事を辞めた人が大勢いました。イエス様が雲に乗って来られるのだと信じて、実際に屋根に乗って待ち望んだ人たちもいます。あるいは、西暦2000年を迎える時も、同じようなことが起こりました。イエス様の再臨が近いから、青年たちは結婚などしないで再臨に備えなさいと教えていた教会もあります。

聖書は神の言葉として読むべきですが、正しく解釈しなければ、どうとでも受け取れるという危険性もあります。黙示録は、いつの時代でも適応できるように象徴を使って私たちに希望を与えるために書かれているのです。それを正しく読み解くためには、黙示録の結論は何かということを理解することが重要です。世の中の間違った読み方に流されないようにしましょう。

■どのように聖書を読むべきか

聖書は、神が人に啓示なさった神の言葉です。ですから、必ず整合性があります。つまり、聖書は、聖書の言葉で解き明かすことができます。それが聖書の読み方の基本です。このことをルターは、「聖書のみ」という言い方をしました。当時のカトリックは、聖書は弟子たちが書いたものであって不完全なものだという立場を取っていました。それを正しく調整するのが教会の務めである、つまり、神は今も預言者を立てて真実を教えると考えます。それがローマ法王であり、聖書にはない教えを法王が補強すると考えられています。イエス・キリストが神であることは変わりませんが、免罪符やマリヤへの祈りなど、聖書にない教えが生まれるのは、聖書の位置づけが違うからです。しかし、神の教えにこの世の権威を用いるのはおかしいと考えたルターによって、プロテスタント教会が生まれたわけです。

「この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。」

(I コリント 2:13)

これがプロテスタントの立場です。では、聖書の言葉で聖書を解き明かす時、何を基準にすべきでしょうか。それは、イエス・キリストが語られた言葉です。

たとえば、世の中の法律は、憲法と整合性が取れていなければなりません。それと同様に、聖書の教えはイエス様の言葉と整合性が取れなければならないのです。アブラハムに言われた言葉なのだからイスラエルに語られたものであって新約の教会とは関係ないものと受け取ってしまうと、イエス様が言われた言葉と相容れないものとなってしまいます。その場合は、イエス様の言葉を主とし、イスラエルとはこういう意味として使われた言葉だなと理解する

のです。あくまでもイエス・キリストが中心です。聖書の言葉だからと言って、すべての言葉を同様に扱うのは間違っています。イエス様ご自身がこうっておられます。

「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。」(ヨハネ 5:39)

ここで「聖書」と言われているのは旧約聖書です。それは私について預言しているのだから、私のもとに来ればよいのだとイエス様は言うておられるのです。本体はキリストであって旧約聖書はその影であるという御言葉もありますが、イエス・キリストが何と言われたかを基準にしなければ、いくら聖書が神の言葉であっても、様々な教理が生まれてしまいます。神の言葉を自分の眼鏡で読んでではありません。

例えば、エホバの証人は輸血を拒否します。それは、聖書の中に「血を飲んではいけない」と書いてあるからです。しかし、これは輸血に関する教えではありません。神は病気の感染経路などがわかっておられたので、生肉などを食べてはいけないと注意をしているだけです。大切なことは、イエス様が何と言われたかということです。聖書を読むときには、これを中心にしなければなりません。

では、イエス様が言われた言葉の中でも、最も中心になるものは何でしょうか。

「だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。」(ヨハネ 12:47)

イエス様が一貫して示しておられる基準は「罪には憐れみ」という基準です。それに対して、この世が持っている基準は「罪には罰」です。この世の視点で読んでしまうために、私たちにはさばきが待っているのだと恐れてしまうのですが、そんなことはないのです。イエス様のことばの中心は救いです。私たちを裁くために来たのではなく、どんな罪も赦すために来られた方です。ただ一つだけ赦されない罪、それはイエス・キリストを信じない罪です。イエス様を信じなければ、当然イエス様が与える赦しを信じることもできません。しかし、救われた者のさばきは確定しているので、もうこれ以上恐れることはありません。私たちのさばきは、「死に値しない」「一緒に天国に行く」と確定しているのです。

黙示録を「罪には罰」という基準で読むとただただ恐ろしい書になってしまいます。しかし、「罪には憐れみ」という立場で読むなら、まことに希望にあふれた書であることがわかります。

何を物差しにして読むかが重要なのです。イエス・キリストの十字架を物差しにしなければ、整合性は取れません。人間的標準でイエス・キリストの言葉を知ろうとすることが畏です。この畏に陥った有名な人物がパウロです。パウロは聖書に精通していました。しかし、罪には罰という人間的標準で読んでいたため、それを否定するイエス様に対してものすごい反発を覚えてキリスト教を迫害しました。しかし、彼はイエス・キリストこそ真実であるこ

とを知り、なぜ自分はこのような過ちを犯してしまったのかを振り返り、それは人間的標準でキリストを知ろうとしたからだということに気づきました。

「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」

(Ⅱコリント 5:16)

人間的標準ではなく、イエス・キリストのことばを中心に読むなら、私たちは死から命に移されていて新しくされた者であり、過去の人生は終わって、新しい人生を生きていることがわかるのです。だから、この御言葉の続きにはこうあります。

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」(Ⅱコリント 5:17)

聖書を読むときは、人間的標準を捨てて白紙の状態で、イエス様が何とおっしゃったのかのみにしっかりと照準を合わせて読むことが大切です。そのためにイエス・キリストはヨハネに福音書を書かせたのです。ヨハネの福音書は、他の福音書と少し異なり、イエスの言葉の真髓に焦点を合わせて書かれた福音書です。そして、ヨハネは手紙を通して愛の交わりを語り、黙示録を通して希望を示しました。

イエス・キリストこそが神が啓示された言葉です。ですから、イエス様が何を語ったのかを中心に聖書を読むことが大切です。そうすれば、聖書の言葉は聖書の中で完結します。これが福音の回復です。様々な基準で聖書が読まれてきた結果、いろいろな解釈が横行しています。自分の基準で聖書を読むことをやめ、今一度、イエス様の言葉を中心に聖書に立ち返りましょう。